

比べ読みによる小学校国語科教材の教材研究の試み

— 「海の命」と「一人の海」の比べ読みにより〈空所〉を埋める（Ⅰ） —

堀 江 祐 爾

A study of Comparative Reading of Japanese Language Teaching Materials:
Fill Blanks from Comparative Reading of *Umi no inochi* and *Hitori no umi* (Ⅰ)

Yuji HORIE

1. 本論の目的

1.1 比べ読みによる教材研究

本論においては、比べ読みによる小学校国語科教材に関する教材研究について考察をおこなう。後に詳述するように、教科書教材とその原作である作品を比べ読むことによって〈空所〉を埋めていくという、教材研究としては、変則的な手法を用いる。変則的と述べたのは、絵本をもとにした教材について、その原作（小説）が存在するというはそれほど多くないためである（もちろん、小説が絵本になっている例は多くあるが、その絵本が「国語科教科書教材」になっている例は少ない）。教科書教材とほとんど同じ構成でありながら、その何倍もの長さをもつ原作と比べ読むことにより、通常であれば埋められない〈空所〉を埋めていく。これを「教材研究」と呼ぶことが妥当であるかどうか批判もあろうが、一つの試みとして以下、考察を展開する。

1.2 「比べ読み」について

『文学教育基本用語辞典』（1989：120）の項目「くらべ読み」によると、「比べ読み」に関する学習指導について理論的にまとめたものとしては、文芸教育研究協議会（文芸研）によるものを挙げることができる。文芸研においては、文芸作品の学習指導の段階を「導入段階…〈だんどり〉」「展開段階…〈とおし読み〉〈まとめ読み〉」「整理の段階…〈感想〉〈つづき読み〉〈くらべ読み〉」のように三つに整理している。〈くらべ読み〉については、次のように解説されている。（下線は論者が加えた。以下同様）。

くらべ読みは、主教材とは異なった主題や思想を持った作品を読者に与え、既習学習で身についた物の見方をより立体的に、多面的に深化しようという意図のもとに設定されている。つづき読みが類似性の強い面を読むことに対して、くらべ読みは、相違性のあるところを特に読みくらべていくのである。

「くらべ読み」は主教材と相違性をもった作品を読み比べていく。先に述べたように、本論における「比べ読み」は教材と原作を比べるため類似性（共通点）が強い。一方、原作の叙述をもとに〈空所〉を埋めるという意味においては相違性（相違点）に着目して作品を読み比べるということもできる。

2. 教材「海の命 (いのち)」と原作「一人の海」の関係

2.1 教材「海の命 (いのち)」と原作「一人の海」

教材「海の命 (いのち)」は平成 8 (1996) 年版より光村図書出版、東京書籍の 2 社の小学校国語教科書に採られてきている。令和 2 (2020) 年版小学校国語教科書において、光村図書出版では 6 年の 3 月単元に、東京書籍版では 6 年の 9～10 月単元に位置づけられている。なお、作品タイトルの表記は、光村図書版では「海の命」、東京書籍版では「海のいのち」となっている。

教材「海の命 (いのち)」は、平成 4 (1992) 年にポプラ社より刊行された絵本『海のいのち』(作・立松和平/絵・伊勢英子) を底本としている。その絵本『海のいのち』は、平成 3 (1991) 年 8 月に『Jump novel1』vol. 1 (集英社) 誌に発表された「一人の海」(作・立松和平/イラストレーション^{きしだいむろう}・岸大武郎) をもとに作られたと推測される。「一人の海」は「海のいのち」と登場人物、展開がほとんど同じである。その後、「一人の海」は、平成 5 (1993) 年に集英社から JUMP J BOOKS の一冊として刊行された短編集『海鳴星』(作・立松和平/illustration・みのもけんじ) に「海鳴星」、「一人の海」、「父の海」という海の三部作として収録された。

教材「海の命 (いのち)」と原作「一人の海」の関係について考察した論考としては、次の 2 つがある。

昌子佳広(2006)は、教材「海の命 (いのち)」と「一人の海」との比較をおこない、「与吉爺(じい)さ」「夢」「お父、ここに…」という観点から考察をおこなった。中野登志美(2017)も、「海の命」と「一人の海」との比較をおこなっている。ただし、「もぐり漁師を志す太一の真意と与吉じいさを漁師の師として選んだ理由」「太一の「夢」」の二つの観点到り絞りに絞っている。

2.2 イーザーの「〈空所〉を読むこと」

国語科教育における読むことの学習指導および教材研究の、中でも「読者論」に含まれる「読者反応理論」の基礎理論として、ドイツの文学研究者、英文学者であるヴォルフガング・イーザー (Wolfgang Iser 以下「イーザー」) の提唱する「〈空所 (blanks)〉を読むこと」が用いられることがある。

イーザー(1982:291)は、〈空所〉の補填に付随する機能について次のように述べている。

テキストはそうにさまざまな組合せからなる一システムであるからには、組合せを具体化する読者のための場もシステム内に用意されているのが当然と考えられる。その場が空所であって、特定の省略の形をとってテキスト内の飛び地 (enclave) を作り出し、読者による占有をまつ。この空所の特色は、空所を作り出しているシステムそのものによっては充填されえず、他のシステムによる補填しかありえぬ点にある。そして補填がなされるとともに、構成活動が始まり、この空所という飛び地がテキストと読者の相互作用を推進する基本的な転換要素の働きを示す。従って、空所は読者の想像活動をひき起こすが、その活動はテキストの示す条件に従うように求められる。

「空所」とは、「『特定の省略の形をとってテキスト内の飛び地 (enclave) を作り出し、読者による占有をまつ』ものである」と定義される。そして、「この空所という飛び地がテキストと読者の相互作用を推進する基本的な転換要素の働きを示す」とあるように、「空所」を読むことによって、テキストと読者の相互作用が推進される。もちろん、「空所」の読みは「その活動はテキストの示す条件に従うように求められている」と、

あくまでテキストにそったものでなければならない。

2.3 教材「海の命（いのち）」に関する〈空所〉の読みに関する先行研究

教材「海の命（いのち）」における「空所」の読みに関する先行研究について押さえておく。

松本修（2018）は、本論において取り上げる教材「海の命」に関する指導論を展開している。「『海の命』の問題点は、テキストに対して読み手が提出する様々な疑問に含まれる空所のうち、埋められる空所と埋められない空所があり、埋められない空所が多いということにある。」と教材「海の命」の問題点を指摘している。そして、大学院生の疑問をもとに、「問い1：おとうがもりを打ったクエと太一の出会ったクエは同じか。」「問い2：太一は、瀬の主にもりを打たなかったことをなぜ誰にも話さなかったのか。」という問いについて、空所をめぐる読みの可能性の検討を展開した。まとめとして、「『海の命』には埋められない空所が多く存在するということは、やはり教材としての弱点であろう。その弱点を超えてこの教材が教科書に生き続けているのは、空所の補填による一貫性のある読みの形成という試みが無限の試みであるということを教えてくれるものだからかもしれない。」と論じている。

大江雅之（2018:3）も、次のように述べて教材「海の命」に関する指導論を展開している。

どうして、教材『海の命』は指導が「難解」とされているのだろうか。

それは、教材『海の命』が「〈空所〉が多い」という作品理解上の課題を孕んでいるからである。教材『海の命』は、絵本『海のいのち』を改稿して教科書に掲載された経緯をもつ。さらに、絵本『海のいのち』は、小説である原作『一人の海』から絵本化に向け大幅に内容が割愛されて誕生した経緯をもっている。つまり、教材『海の命』は、小説である原作『一人の海』から大幅に内容が割愛された絵本『海のいのち』を経て、教科書掲載のためにさらに絵が複数割愛されて誕生した文学的文章教材となるのである。よって、教材『海の命』は、叙述が少なく〈空所〉が多い特質をもっている。読者の想像で〈空所〉を補い、授業の学習課題とされてきた部分が、原作『一人の海』では、詳細な描写や語りによって明確に表現されているのである。

大江雅之（2018）において、すでに授業実践に即しながら「海の命」と「一人の海」の比べ読みによる〈空所〉についての考察がおこなわれている。その意味では、本論の新規性、独創性は弱いかもしれないが、教材研究としての「海の命」と「一人の海」の比べ読みを詳細におこなうという意味において、先行研究を生かしながら、それをさらに「深化」という意義を本論文は有する。

大江雅之（2018:99）は、先行研究や実践をもとに、教材「海の命」の〈空所〉を表1のようにまとめている（囲み数字は本論論者が添えたものである）。なお、表中の「結合」とは、「テキストから選択された要素をテキストの理解ができるように組み立てることである。」

本論においては、「授業の学習課題とされてきた部分が、原作「一人の海」では、詳細な描写や語りによって明確に表現されている」ことに着目して、その〈空所〉を埋める。表1には12カ所の〈空所〉が示されている。本論においては紙幅の都合により、12カ所の〈空所〉のうち、**1**から**7**までの〈空所〉を扱うことにする。残りは稿を改めて論じたい。

表1 「海の命」の主な〈空所〉 大江雅之 (2018:99) より

場面	〈空所〉の内容	〈空所〉になる理由・備考
一	①父の人物像がはっきりと描けない。	・父が「闘争本能」と「謙虚さ」という相反するエピソードで描かれていて混沌とする。
一	②父の死因がはっきりとしない。	・瀬の主との死闘なのか事故による死なのかが分からない。
一	③太一の父の死への思いが見えない。	・太一の思いを見せないことで、クライマックスの行動への驚きや疑問を創り出している。
二	④与吉じいさへの弟子入りの理由が分からない。	・なぜ当時、漁法の異なる与吉じいさへ弟子入りしたのかが見えない。
二	⑤太一の修行の様子が見えない。	・「一人の海」には描かれている濃密な修行の時間が描かれていない。
四	⑥母の人物像と太一と母の関係性が見えない。	・母の描写があまりにも少なすぎて、登場人物として成り立っていない印象を受ける。
五	⑦太一の夢の内実が分からない。	・「一人の海」では明確になっている夢の内実が描かれていなく、三通りの学習者の反応が考えられる。
五	⑧太一が「何のために瀬の主を探していたのか」が分からない。	・語り手が「夢」という表現をしたために、逆に太一が何をしたかったのかが半然としない。
五	⑨太一は「なぜ瀬の主を殺そうと思っていたのか」がはっきりとしない。	・「父のかたきを討つため」か「父を超えるため」なのか、結合が二項対立する。
五	⑩太一は「なぜ、瀬の主にもりを打たなかったのか」がはっきりとしない。	・最重要な〈空所〉として、様々な結合の可能性をもっている。
六	⑪なぜ、瀬の主でに出会ったことを「当然」誰にも話さなかったのかが分からない。	・「話せない内容」の捉え方によって四通りの学習者の反応が考えられる。
題名	⑫「海の命」とは何なのかがはっきりとしない。	・題名の他に二箇所登場。第五場面の登場が矛盾しており、読者の想像力を喚起させている。

3. 「海の命」と「一人の海」の比べ読みにより〈空所〉を埋める

以下、「海の命」と「一人の海」の比べ読みをおこないながら、考察を加え、それにより〈空所〉を埋める。なお、教材については光村図書（令和2年版）の「海の命」の本文を用いる。「一人の海」については、『海鳴星』に収録された「一人の海」を用いる。「海の命」の叙述は実線で囲み、「一人の海」の叙述は破線で囲んで示す。『海の命』から抜き出した叙述が複数ある場合、便宜的に〈 〉をつけた番号を添えた。

3.1 空所1 父の人物像がはっきりと描けない

- ・父が「闘争本能」と「謙虚さ」という相反するエピソードで描かれていて混沌とする。

【海の命】 父はもぐり漁師だった。潮の流れが速くて、だれにももぐれない瀬に、たった一人でもぐっては、岩かげにひそむクエをついてきた。二メートルもある大物をしとめても、父はじまんすることもなく言うのだった。

「海のみぐみだからなあ。」

不漁の日が十日間続いても、父は少しも変わらなかった。

【海の命】では、「もぐり漁師」という漁法の種類しか示されない。「潮の流れが速くて、だれにももぐれない瀬に、たった一人でもぐっては」は、確かに父の〈闘争本能〉を描いている。それに対して、「二メートルもある大物をしとめても、父はじまんすることもなく言うのだった。」は〈謙虚さ〉を示している。「海のみぐみだからなあ。」というセリフも、自分の力ではないという意味において、〈謙虚さ〉を表す表現と受け取ることができよう。「不漁の日が十日間続いても、父は少しも変わらなかった。」も〈謙虚さ〉の延長と捉えることができる。

【一人の海】 父はクエ突きの名人だった。一人で瀬に潜っては、岩陰に潜むクエを突いてきた。仕留めても一人では船の上にあげることができず、船腹でしばって来た。艦をこいでいても、そんなクエが獲れた時には船が曲がっているので浜からでもよくわかった。

どんなに大物が獲れた時でも父は自慢する様子もなく、人に手伝わせて獲物を魚市場に水揚げすると、いつも肪もやっておく港のほうに船をまわした。獲物があってもなくても、父は同じ顔をしていた。

「龍神様の恵みりゅうじんさままい。ありがたくいただいておくことにしたばいね」

体長二メートルもあるクエを仕留め、まわりの人が驚いた表情をしていても、父は淡々としていた。そのかわり不漁の日が二週間つづいても父の態度は変わらなかった。

「漁じゃから、大漁の時もあれば、不漁の時もあるばい。腹が減って腹の皮と背中しけの皮とがくっつきそうになつたって、時化しけばなれぬ魚にはでられんばいねえ」

父には浜にぼんやりとしゃがんで海を眺めている時間が長かった。風がなくて凪ないでいても、海にこぎださない日もあった。今ならば太一にはわかるのだが、父は潮目しおめを読んでいたのである。無理にこぎだしてもクエが獲れないのはわかっていたのだ。海の底のクエと、父は浜たにいながら対話をしていたのだといえる。

クエ獲り名人と村人に讃たたえられる父を持ちながら、太一の家は貧乏だった。父はタイにもブリにもカンパチにも目をくれず、ましてアワビやサザエやウニなど問題にもせず、クエしか獲ろうとしなかったからだ。

偏屈太助が父の通り名であった。[pp. 58-59]

【一人の海】においては、「クエ突きの名人」「クエ獲り名人と村人に讃えられる」と「クエ」という特定の魚を対象とした「突き」という漁法についての「名人」であることが明示される。クエを捕獲するという行為からは、確かに〈闘争本能〉的なものを読み取ることができよう。それに対して、「どんなに大物が獲れた時でも父は自慢する様子もなく」と〈謙虚〉な様子も描かれる。ただし、単なる〈謙虚〉ではなく、「まわりの人が驚いた表情をしていても、父は淡々としていた」のように、父の態度は〈淡々〉としている。その〈淡々〉さをより強めているのが、次に続く「そのかわり不漁の日が二週間つづいても父の態度は変わらなかった」であろう。クエが獲れようが獲れまいが〈淡々〉としているのである。さらに、「父は潮目を読んでいたのである。無理にこぎだしてもクエが獲れないのはわかっていたのだ。海の底のクエと、父は浜にいながら対話をしていたのだ」と、潮目を読みながら海の底にいるクエと「対話」をしている。これも〈淡々〉さのひとつであろう。「クエしか獲ろうとしなかった」父には「偏屈太助」という通り名がつけられた。父は、周りから尊敬はされながらも、理解はされていない。それは、〈闘争本能〉と〈謙虚さ〉とを内在させた〈淡々〉とした存在であったためであろう。

3.2 空所2 父の死因がはっきりとしない

・瀬の主との死闘なのか事故による死なのか分からない。

【海の命】 ある日、父は、夕方になっても帰らなかった。空っぽの父の船が瀬で見つかり、仲間の漁師が引き潮を待ってもぐってみると、父はロープを体に巻いたまま、水中でこときれていた。ロープのもう一方の先には、光る緑色の目をしたクエがいたという。

父のもりを体につきさした瀬の主は、何人がかりで引こうと全く動かない。まるで岩のような魚だ。結局ロープを切るしか方法はなかったのだった。

【海の命】においては、時系列がはっきりとは示されていない。一日の出来事であるようにも読み取れる。「父はロープを体に巻いたまま、水中でこときれていた。ロープのもう一方の先には、光る緑色の目をしたクエがいたという。」と、父の死とクエの存在だけが示される。「何人がかりで引こうと全く動かない。まるで岩のような魚だ。結局ロープを切るしか方法はなかったのだった。」と、クエに対する処置だけが述べられており、たしかに〈死因〉がはっきりとしない。

【一人の海】 だがその日父は黄昏たそがれになっても戻らなかった。さすがに心配になった母が仲間の漁師にいったので、搜索の船がでた。父が漁に行くところはいつも決まった瀬だった。瀬には 錨いかりをうった父の小船が波に揺れていた。父の姿はなく、昼の弁当も手につけられていなかった。父が遭難した可能性は高かった。すでに暗くなっていたので、海中に潜って確かめることは無理だ。

翌朝夜明けとともに村中の漁師が瀬に集まった。そこにきたのは一人前の男だけだった。母と幼い太一とは家にいた。まだ幼くても太一には父の身の上になにが起きたのかはわかっていた。母からのまた聞きではあったが、太一はその時の情景をまるで実際に見たかのように記憶に焼き付けていた。

昨夕来そのままにしていた父の船はやはり空からであった。弁当もそのまま、腐臭を放っていた。父と親しい漁師たちが腰に鉛の錘おもりを巻いて次々と海中に潜っていく。瀬とはいっても潮の流れの激しいところで、流されながら漁師たちは改めて父の潜水の技量の確かさを思ったという。潮が行き来するから魚も多い。だが入り組んだ岩の間にいるクエを仕留めるといのは名人技だと、漁師たちは舌を巻いたことであった。その瀬は難所として漁師も近づかないところなのである。

父はロープを身体からだに巻いたまま水中でこと切れていた。ロープのもう一方の先をたどっていくと岩の穴の中につづき、そこには緑色の光る目をしたクエがいたという。瀬ぬしの主である。瀬には主のクエがいて、まるで岩のようだと、父はよく話していた。そのクエが岩の奥に潜み、父とロープの引きくらべをしていたのだ。ロープの先端もりの銚もりは、もちろんクエの身体に深々とささっていた。

何人掛かりで引こうと、穴の奥のクエは微動だにしない。まるで岩のようだといういい方がぴったりな、これまで見たこともないほどの巨大なクエであった。父でも闘いいに敗れたほどであるのだから、父以外の漁師が何人掛かってもかなう相手ではない。結局ロープを切って父の遺骸いがいだけを引き上げてきた。[pp. 61-64]

【一人の海】においては、時系列が明示される。「その日父は黄昏になっても戻らなかった」→「心配になった母が仲間の漁師にいった」→「搜索の船がでた」→「父が遭難した可能性は高かった」→「すでに暗くなっていたので、海中に潜って確かめることは無理だ」→「翌朝夜明けとともに村中の漁師が瀬に集まった」というように、日をまたいでの搜索であったことがわかる。「父はロープを身体に巻いたまま水中でこと切っていた（これは【海の命】においてもほぼそのまま使われている）」→「ロープのもう一方の先をたどっていくと岩の穴の中につづき、そこには緑色の光る目をしたクエがいたという」→「父とロープの引きくらべをしていたのだ。ロープの先端の銚は、もちろんクエの身体に深々とささっていた」→「父でも闘いに敗れたほどであるのだから、父以外の漁師が何人掛かってもかなう相手ではない」→「結局ロープを切って父の遺骸だけを引き上げてきた」。このように、父の〈死因〉が〈クエとの死闘〉であることが明確に描かれている。

3.3 空所3 太一の父の死への思いが見えない

- ・太一の思いを見せないことで、クライマックスの行動への驚きや疑問を創り出している。

【海の命】 太一の父の死への思いに関する記述はない。

【一人の海】 「漁師は海で死ぬのがなんばゆうても幸福ばい。母親の胸ば抱かれるこつある」

父の遺体を前にして母親がいった言葉が、太一には鮮明に印象に残っていた。それ以来父は二度と太一の前姿を見せなかったのであるが、太一は父が海に抱かれているのだと考えると少しは気持ちを落ち着かせることができたのだ。[p. 64]

【一人の海】では、母が「漁師は海で死ぬのがなんばゆうても幸福ばい。母親の胸ば抱かれるこつある」と発言するが、これは夫を失った自分に言い聞かせているのであろう。「父の遺体を前にして母親がいった言葉が、太一には鮮明に印象に残っていた。」と、このセリフは太一に受け継がれる。次の世代に受け継がせるべき言葉を、母が子に伝えたとも捉えることができる。「太一は父が海に抱かれているのだと考えると少しは気持ちを落ち着かせることができた」と、父という大きな存在を喪失した太一は、この言葉を受け継ぎ、そしてやはり自分に言い聞かせる。ここには、父—母—息子の間をつなぐ絆が明確に存在する。

3.4 空所4 与吉じいさへの弟子入りの理由が分からない

- ・なぜ当時、漁法の異なる与吉じいさへ弟子入りしたのかが見えない。

【海の命】 中学校を卒業する年の夏、太一は与吉よきちじいさでしに弟子にしてくれるようたのみに行った。与吉じいさは、太一の父が死んだ瀬に、毎日一本づりに行っている漁師だった。

「わしも年じゃ。ずいぶん魚をとってきたが、もう魚を海に自然に遊ばせてやりたくなっとる。」

「年を取ったのなら、ぼくをつえの代わりに使ってくれ。」

こうして太一は、無理やり与吉じいさの弟子になったのだ。

【海の命】の叙述では、「こうして太一は、無理やり与吉じいさの弟子になったのだ」と、太一がすんなりと与吉じいさの弟子になったように読み取れる。

【一人の海】 村には太助瀬に毎日通っている漁師が一人だけいた。与吉爺よきちじいさんと呼ばれる老漁師は、昔からたったひとつの漁法だけをつづけていた。飼かい付け漁と呼ばれる釣りだ。毎日餌をまきにいって瀬の決まった部分に魚を飼かい、必要なだけ釣ってくるのである。太助瀬について村で一番よく知っているのは、与吉爺さであった。

「与吉爺さ、ひとつ頼みがありますはい。俺を弟子ばしてくれんとですか」

時化で海にでられない日、太一は与吉爺さんの家に頼みにいった。婆ばあさんに先立たれた爺ぢいさは、古い家に一人で住んでいた。昔この村に大津波が襲おそいかかったことがあった。沖合おきいに屏風びょうぶのように立った波が天と地とを鳴らして浜ひらに押し寄せるのを見た村人たちは、取るものも取りあえず山の畑のがに逃れた。しかし、多くの人のが波に呑まれて死んでいったという。婆ばあさんは畑仕事をしていて無事だったのだが、与吉爺よきちじいさんは沖合おきいに漁いっていたのだ。船ごと波に呑まれた爺ぢいさが、息をふき返したところは、山の松の木の上であったという。ほとんどの村人が家を失った。もちろん与吉爺よきちじいさんも、太一の父の太助も、全財産を波にさらわれ海に持っていかれてしまった。土台ひどだけが残った浜辺の土地に最初に家を建てたのは与吉爺よきちじいさだったという。酷いめにあったばかりで尻込みする村人に、与吉爺よきちじいさは平然とこういったという。

「漁師が海から逃げてどげんすると。海は津波よりもよかもんを毎日どっさりくれようが。海から逃げたら漁師ではなか」

与吉爺よきちじいさはすっかり気が弱くなった漁師たちを励ましたのである。海とは心して繊細に付き合わねばならないが、命いのち惜しみて逃げてばかりいれば、生活も心も貧しくなっていくよ追おい込まれていくであろう。そんなふうそに海のことを知りつくしている与吉爺よきちじいさが、太一は好きだった。

弟子にしてくれと申し出た若い太一に、与吉爺よきちじいさはこう応えた。

「わしはもう年じゃ。ずいぶん魚ば獲ってきたが、これ以上獲るのも罪深いものじゃけん。魚を海に自然に遊ばせておいてやりとうなっちゃうる」

「年ばとったなら、俺を杖がわりに使ったらよかろうが」

「面倒めんどうばい。弟子はとらん」

「何度でもよかばってん、漁いに連れていってくれんとか。一緒にいくぐらいよかろうが」

こうして太一は与吉爺よきちじいさに強引に頼み込み、漁いに同行させてもらうことにした。その人の将来に対して責任をとらないという形の弟子であった。それも与吉爺よきちじいさんの年齢を考えれば当然のことであった。[pp. 67-69]

【一人の海】では、「村には太助瀬に毎日通っている漁師が一人だけいた」「昔からたったひとつの漁法だけをつづけていた。飼かい付け漁と呼ばれる釣りだ」ということを頼りに、太一は与吉爺よきちじいさに近づく。それだけではない。「太助瀬について村で一番よく知っているのは、与吉爺よきちじいさであった」と、父である太助の名がつけられた瀬について一番よく知っているということもその理由である。その与吉爺よきちじいさはただの漁師ではない。「昔この村に大津波が襲おそいかかったことがあった」時に、「土台ひどだけが残った浜辺の土地に最初に家を建てたのは与吉爺よきちじいさだった」のである。「漁師が海から逃げてどげんすると。海は津波よりもよかもんを毎日どっさりく

れようが。海から逃げたら漁師ではなか」と言い切る。「そんなふうには海のことを知りつくしていると与吉爺さが、太一は好きだった」と、太一が与吉爺さを自ら選んで〈弟子入り〉したことがわかる。

3.5 空所5 太一の修行の様子が見えない

・「一人の海」には描かれている濃密な修行の時間が描かれていない。

【海の命】 (1) 与吉じいさは頼に着くや、小イワシをつり針にかけて水に投げる。それから、ゆっくりと糸をたぐっていくと、ぬれた金色の光をはね返して、五十センチもあるタイが上がってきた。パタパタ、パタパタと、タイが暴れて尾で甲板を打つ音が、船全体を共鳴させている。

太一は、なかなかつり糸をにぎらせてもらえなかった。つり針にえさを付け、上がってきた魚からつり針を外す仕事ばかりだ。つりをしながら、与吉じいさは独り言のように語ってくれた。

「千びきに一びきでいいんだ。千びきいるうち一びきをつれば、ずっとこの海で生きていけるよ。」

(2) 弟子になって何年もたったある朝、いつものように同じ瀬に漁に出た太一に向かって、与吉じいさはふっと声をもらした。そのころには、与吉じいさは船に乗ってこそきたが、作業はほとんど太一がやるようになっていた。

「自分では気づかないだろうが、おまえは村一番の漁師だよ。太一、ここはおまえの海だ。」

小関智弘 (2003:56) は、「技は見て憶えろ、盗んで習えで、ちっとも教えてくれないのが職人の世界だ」と言う人が多い。その道を経験した人もそう言うし、傍からもそう見えるらしい。」と述べている。(/ は改行を示す。以下同様) ⁸

【海の命】では、〈1〉のように、「太一は、なかなかつり糸をにぎらせてもらえなかった。つり針にえさを付け、上がってきた魚からつり針を外す仕事ばかりだ。」と、まさに下働きばかりをする徒弟制度的な修行のように描かれている。そして、〈2〉では、「そのころには、与吉じいさは船に乗ってこそきたが、作業はほとんど太一がやるようになっていた。」と太一が作業のほとんどを任せられるようになっていたという前提は添えられているが、「与吉じいさはふっと声をもらして、「自分では気づかないだろうが、おまえは村一番の漁師だよ。」と唐突に語る。この「自分では気づかないだろうが」には、まさに教えずして教えるという徒弟制度的な修行であることが示されていると言ってもよいであろう。

【一人の海】 太一が与吉爺さとはじめて出漁しようとする朝は霧が深かった。いつもなら出漁の準備をする漁師や走りまわる車や船のエンジンの音で賑わいを見せる港も、人影はほとんどなくひっそりとしていた。霧の中から現われるのは、船のマストや舳先ばかりであった。船の森に迷い込んだようなこんな朝も太一は好きだった。他の漁師たちはみんな出漁をあきらめて家にいるのだ。太一は与吉爺さの家の倉庫から釣り道具がいられたる箱と餌の小イワシのはいったトロ箱とを持って、与吉爺さのあとにしたがった。

乗船するや、与吉爺さはエンジンをかけた。太一は綱とりからとも綱をはずし、船に向かって岸壁を飛んだ。大きな船ではないのに、甲板から海面が見えないほどに霧が濃い。与吉爺さは太一が乗っているのを声を掛けて確かめると、無造作に船を走りださせた。ぼんやりとした船の影がすぐ横を後退っていく。目をつぶって走っているのも同然なのに、与吉爺さの舵さばきには躊躇もない。

「レーダーのスイッチはまいておらんとですよ」

思わず与吉爺さに向かって太一は声を飛ばした。レーダーや無線やソナーが装置されていることは外から見

ただけでもアンテナが立っているのでわかるのだが、肝心の電源がはいっていないので表示の画面は暗い。魚群探知機さどうも作動していない。船自体は決して新しくないのだが、与吉爺さは他の船が装備しているような機械をすべてつけていた。しかし、電源をいれていないのだ。思わず太一はエンジンの音に負けまいと大声でくりかえすのだ。

「スイッチばはいっておらんとですたい。機械に血が通っておらんこつばい」

すると与吉爺さからは静かな声が返ってくるのだ。

「レーダーなど使い方は知っちゃらんばい。そんなもんいらん」

「それならこげな高いもんなんばしてつけたとですか」

「漁協がつけるっちゅうてやかましいからじゃ」

こんな会話をつづけながら、与吉爺さは迷いもなく蛇を取りつづけた。もし先方の船にレーダーが取り付けであるのならどくのは当然だというふうな走り方であった。いやそう見えたのは太一がまだ若すぎるからで、与吉爺さにしてみれば毎朝通う決まりきった道を走っていたに過ぎないのである。心の中に海の道ははっきりと見えていたのだ。

霧は深かったが、波はほとんどなかった。こんな朝は魚には絶好の日よりである。気温のわりに海水のほうが温かく、それで霧が湧いているのかもしれないなかった。霧は海の中とはなんの関係もないのである。魚があらわれてくるような潮の動きだということが、太一にもわかってきた。

「弟子ならば、餌の用意ばしてくれんとね。ぼーっと立っちゃらんで」

皺しわになってゆるやかに盛り上がる白い波を眺めていた太一は、与吉爺さ*に*いわれて思わず口応えした。

「弟子はとらんちゅうたでしようが」

「それじゃお前は何ね」

「客じゃ」

「この船の客なら働かねばおいとかん。トロ箱のイワシをミンチばせんね」

与吉爺さの飼付け漁の話をして、太一は話として知っていた。乗船する前にも、ああしようこうしよう自分の行動を頭の中に思い描いてはおいたのである。

まず太一は冷凍の小イワシをトロ箱ごと甲板に置き、平らなスコップの先で打つ。何日か何ヵ月か前までは海中で群をなし自由自在に泳ぎまわっていたイワシは、みるみる形をなくしていく。命などなんとはいかないものだろうと、ほんの一瞬だが太一は考えてみたりもした。

真白やみい闇そうだの中のような霧の中で操舵そうだをしていた与吉爺さは、船の動きを止めた。潮が流れてくるので、船を同じ位置に静止させておくためには、たえずエンジンをかけていなければならない。舵とエンジン出力調整レバーに長い棒をつけ、他のことをしながら片手だけで船をコントロールできるような改造がほどこしてあった。

「エンジンの音を聞いただけで、餌がもらえる思うて魚は集まってきよる。いつも同じエンジンじゃなかいかん。魚は魚の耳を持つちよるばい」

与吉爺さは太一に向かって話しかける。海のこと漁のことを教えてやるつもりなのである。与吉爺さのそんな気持ちを、太一は敏感に察知する。イワシのミンチをつくる手の動きをやめないまま、太一は与吉爺さの声や、潮の音や、エンジンの響きや、その他聞こえてくるものすべてに対して聞き耳を立てる。太一にとっては何もかもが新鮮な学びの海なのだ。

「霧が晴れば正面の陸地に松の木が見える。ずっと岬の先のほうにも松の木があって、山の頂^{いただき}とちょうど正三角形をつくる。それがポイントばい。潮が引いても暗礁にはあたらず、魚もぶつかるほど泳いだるばい。今まで誰にも教えんこつよ。ここにおれば、魚のほうで生^{いけす}簍の中に跳び込んでくるこつあるばい。あとは技術などちいともいらん」

与吉爺さがいうことを、太一はひとつ洩らさず胸の奥に畳んで仕舞い込む。仕舞ったものは必ず外にでて役立つものである。巻網、流し網、刺し網など、漁協の許可はあるものの、漁法にはその時その時の流行のようなものがある。だが与吉爺さは太一の父親太助のように、たったひとつの漁法に生涯をかけてこだわりつづけてきたのである。広い太助瀬の片隅で、与吉爺さは与吉爺さの海をつくってきた。 [pp. 69-74]

小関智弘 (2003:56) は、先に示した職人に関する通説について次のように続けている。「それは、全国のどの職種にも共通した、いわば通説となっているらしい。でもわたしは、それは俗説ではないかと思う。／職人は教え下手ではあるが、育て上手でもある。」と職人の両面性について言及している。

【一人の海】においては、修行の初日、「太一が与吉爺さとはじめて出漁しようとする朝」が詳細に描かれる。「他の漁師たちはみんな出漁をあきらめて家にいる」くらい、「甲板から海面が見えないほどに霧が濃い」状況であるが、「目をつぶって走っているのも同然なのに、与吉爺さの舵さばきには躊躇もない。」と、与吉爺さが他の漁師よりもかなり卓越した技能の持ち主であることがわかる。技能の差は歴然としているが、太一はそれに圧倒されて黙っている男ではない。「スイッチばいっておらんとですたい。機械に血が通っておらんこつばい」と与吉爺さに声をかける。すると、「レーダーなど使い方ば知っちゃらんばい。そんなもんいらん」と与吉爺さが返す。「太一がまだ若すぎるからで、与吉爺さにしてみれば毎朝通う決まりきった道を走っていたに過ぎないのである。心の中に海の道ははっきりと見えていたのだ。」と、太一の若さに対して与吉爺さの老練さが対比される。次の会話に注目したい。「弟子ならば、餌の用意ばしてくれんとね。ぼ一つと立ちよらんで」と与吉爺さと言う。「弟子はとらんちゅうたでしょうが」と問いかける太一。「それじゃお前は何ね」と与吉爺さが問い返す。太一は「客じゃ」と答える。それを受けて、「この船の客なら働かぬばおいかん。トロ箱のイワシをミンチばせんね」と与吉爺さがたたみかける。弟子ではないと太一は言うが、働き手としては受け入れている。さらに、「エンジンの音を聞いただけで、餌がもらえる思うて魚は集まってきよる。いつも同じエンジンじゃなかいかん。魚は魚の耳を持ちよるばい」と、「与吉爺さは太一に向かって話しかける。海のこと漁のことを教えてやるつもりなのである。与吉爺さのそんな気持ちを、太一は敏感に察知する。」のように、事実上教える一教わるという関係が成立している。つまり、弟子としての修行がおこなわれている。「太一は与吉爺さの声や、潮の音や、エンジンの響きや、その他聞こえてくるものすべてに対して聞き耳を立てる。太一にとっては何もかもが新鮮な学びの海なのだ。」と、太一が学びの海にいたことが明確に描かれている。「今まで誰にも教えんこつよ。ここにおれば、魚のほうで生簍の中に跳び込んでくるこつあるばい。あとは技術などちいともいらん」と、与吉爺さは誰にも教えていなかったことを太一に授ける。「与吉爺さがいうことを、太一はひとつ洩らさず胸の奥に畳んで仕舞い込む。仕舞ったものは必ず外にでて役立つものである。」と、太一は与吉爺さの教えを吸収する。「たったひとつの漁法に生涯をかけてこだわりつづけてきたのである。広い太助瀬の片隅で、与吉爺さは与吉爺さの海をつくってきた。」には、父のもぐり漁とは違う飼い付け漁ではあるが、「ひとつの漁法に生涯をかけてこだわりつづけてきた」ことに対する敬意が感じられる。「仕舞ったものは必ず外にでて役立つ」と書かれているように、ひとつの漁法を極めたことは他の漁法にも役立つもの

なのである。

3.6 空所6 母の人物像と太一と母の関係性が見えない

・母の描写があまりにも少なすぎて、登場人物として成り立っていない印象を受ける。

【海の命】 ある日、母はこんなふうに言うのだった。

「おまえが、おとうの死んだ瀬にもぐると、いつ言いだすかと思うと、私はおそろしくて夜もねむれないよ。おまえの心の中が見えるようで。」

太一は、あらしさえもはね返す屈強な若者になっていたのだ。太一は、そのたくましい背中に、母の悲しみさえも背負おうとしていたのである。

母が毎日見ている海は、いつしか太一にとっては自由な世界になっていた。

【海の命】において、太一にその母が声をかけるのはこの「おまえが、おとうの死んだ瀬にもぐると、いつ言いだすかと思うと、私はおそろしくて夜もねむれないよ。おまえの心の中が見えるようで。」だけである。そして、太一は「母の悲しみさえも背負おう」とするようになり、「母が毎日見ている海」に生きる男となった。上に示した部分以外に、母が出てくるのは終末部の「母は、おだやかで満ち足りた、美しいおばあさんになった。」だけである。

【一人の海】 「お前が何を考えとるか、おっ母にはよくわかるばい。まるで掌の中にあるかごつわかるばい」

与吉爺さの船から帰ってきた太一に、母はよくこんないい方をした。与吉爺さは昼になるずっと前にその日の漁をやめてしまうので、太一は弁当を持っていったことがなかった。身体が弱くなって外にめったに働けなくなかった母と、太一は昼食をとることが日課になっていた。

「何も考えちゃらん。ただ一人前の漁師になりたかばいと思うちよる」

太一が持ち帰ってくるタイヤイサキは市場にだしてしまい、家の食卓にのせる魚は近所の漁師からもらったものばかりだった。

「一人前の漁師になってどうするつもりね」

「一人前に嫁ばもらって、子をばつくるばい。おっ母にも楽をさせるばい」

「どうしてお父の瀬にいつちよるたいね」

「あそこには魚がおる。与吉爺さはあの瀬に魚を飼い付けしちよるばい」

「お父の敵をとろうとを考えちよること、おっ母にはお見通しよ。お父でさえ敗けたクエよ。半人前のお前にどうして敵打ちができるね。そんなことば考えちよると、おっ母は夜も眠れんばい」

昼の光が縁先に跳ねていた。その向こうには光る海がある。海はまるで光でできているかのようだった。命あふれる海だが、死の海でもある。太一は母親に心の底まで正確に見ぬかれていることに改めて驚いた。母は息子の死を案じているのである。

「俺は与吉爺さの弟子よ。飼い付け漁をやちよる。お父とは道が違う。お父の域にはまだまだ達せんことは、俺が一番よく知ちよるばい」

一応太一はこういつてみるのであったが、血を分けてもらった母に心の底まで見透されていることに、改めて驚くのであった。母に何をいわれたところで、太一の決意がぐらつくわけでもない。[pp. 79-81]

【一人の海】においては、母と太一は次のように対話を重ねている。

「お前が何を考えるとるか、おっ母にはよくわかるばい。まるで掌の中にあるかごつわかるばい」／「何も考えちよらん。ただ一人前の漁師になりたかばいと思うちよる」／「一人前の漁師になってどうするつもりね」／「一人前に嫁ばもらって、子をばつくるばい。おっ母にも楽をさせるばい」／「どうしてお父の瀬かたきにいつちよりたいね」／「あそこには魚がおる。与吉爺さはあの瀬に魚を飼い付けしちよるばい」／「お父の敵をとろうと考えちよること、おっ母にはお見通しよ。お父でさえ敗けたクエよ。半人前のお前にどうして敵打ちができるね。そんなことば考えちよると、おっ母は夜も眠れんばい」

「太一は母親に心の底まで正確に見ぬかれていることに改めて驚いた。母は息子の死を案じているのである。」と、太一は母に「心の底まで正確に見ぬかれていること」に驚いている。母にとってそれは「息子の死」に関する大問題である。とはいえ、「母に何をいわれたところで、太一の決意がぐらつくわけでもない。」と、大人に成長した太一は、もはや母と同等の位置にいるのである。

3.7 空所7 太一の夢の内実が分からない

・「一人の海」では明確になっている夢の内実が描かれていなく、三通りの学習者の反応が考えられる。¹

【海の命】 (1) いつもの一本づりで二十びきのイサキをはやばやととった太一は、父が死んだ辺りの瀬に船を進めた。

いかりを下ろし、海に飛びこんだ。はだに水の感しよく触がここちよい。海中に棒になって差しこんだ光が、波の動きにつれ、かがやきながら交差する。耳には何も聞こえなかったが、太一は壮大な音楽そうを聞いているような気分になった。とうとう、父の海にやっ来て来たのだ。

太一が瀬にもぐり続けて、ほぼ一年が過ぎた。父を最後にもぐり漁師がいなくなったので、アワビもサザエもウニもたくさんいた。激しい潮の流れに守られるようにして生きている。二十キロぐらいのクエも見かけた。だが、太一は興味をもてなかった。

(2) 追い求めているうちに、不意に夢は実現するものだ。

太一は海草のゆれる穴のおくに、青い宝石の目を見た。

【海の命】では、(1)のように、「父が死んだ辺りの瀬に船を進めた。」と父の死と瀬との関係が明示される。さらに、「とうとう、父の海にやっ来て来たのだ。」という説明がなされる。「太一が瀬にもぐり続けて、ほぼ一年が過ぎた。」と、時間の経過も述べられる。ところが、瀬にもぐり続けている様子はあまり描かれておらず、(2)のように、唐突に「追い求めているうちに、不意に夢は実現するものだ。」という物語のクライマックスへといざなう。そして、「太一は海草のゆれる穴のおくに、青い宝石の目を見た。」と、あのクエに出会えたことが暗示される。

【一人の海】 追い求めているうちに、いきなり夢は実現するものだ。最初のクエを仕留めてからちょうど一ヵ月たち、潜るにもそろそろ水も冷たくなってきた頃であった。海の中は季節の移ろいを濃く映す。抜けて流れ藻になり回遊魚たちに産卵の場を提供したホンダワラが、岩の上からまた新しい芽を伸ばしてきた。同時にそれまで色鮮やかだった海草が枯れはじめていた。丸々と太った大きなブリの姿もちらほらと目につくようになっていた。飼い付け漁をしていても海の中の変化はうかがい知れるのだが、潜水をすればそれを実際に見ることができる。

いつもの通りいつもの場所に銚子を持って潜った太一は、雰囲気がいつもととは微妙に違うことを感じた。それを季節の移ろいのせいだと思ったのである。ウニもアワビもサザエも網袋に一杯獲るのは太一にはわけもないことだったから、素潜りを楽しむようになっていた。だがそれまで磨きに磨いてきた五感と第六感とが、太一に名状しがたい感覚を伝えていた。

銚子の刃先をたえず顔の前にだすようにして潜った。時折ブリの群が高速列車のように海水を泳いでいく。もちろん音は聞こえなかったのだが、轟音を立てて空を飛び去っていくようにも見えた。

緊張を感じてはいたにせよ、それまでの生涯を賭けた瞬間に、太一はあっけなく立ち至ってしまったのだ。太一は海草の揺れる岩の穴の奥からこちらをうかがっている視線を感じたのである。そろそろ潜水していられる限界に近づいていたのだが、水中眼鏡の奥から太一も強い視線を返した。親しい友としばらくぶりで会ったような親密さを、太一は覚えた。そこには緑色に光る宝石の目があったのだ。 [pp. 101-103]

【一人の海】では、「追い求めているうちに、いきなり夢は実現するものだ。」が示されたのちに、漁の様子子が詳細に描写される。もちろん、この〈夢〉は〔空所6〕において述べたように「お父の敵をとろうと考えよ」ということである。「いつもの通りいつもの場所に銚子を持って潜った太一は、雰囲気がいつもとは微妙に違うことを感じた。」「それまで磨きに磨いてきた五感と第六感とが、太一に名状しがたい感覚を伝えていた。」と、じわじわと緊張感を高めている。そして、「緊張を感じてはいたにせよ、それまでの生涯を賭けた瞬間に、太一はあっけなく立ち至ってしまったのだ。」と、「生涯を賭けた瞬間」に「あっけなく立ち至ってしまった」という叙述が続く。そして、「そこには緑色に光る宝石の目があったのだ。」という暗示がようやくなされる。〈夢〉の実現に至るまでの状況が丁寧に説明されているのである。

*

以上、紙幅の関係のため、12の〈空所〉のうち7つしか扱うことができなかった。残りについては稿を改めて論じることにしたい。

4. 結語

松本修(1997:4)は次のように、教材研究および授業の構想の段階における、「比べ読み」(「重ね読み」)の効用について論じている。

二つ以上の教材を比べるのは、比べることによって、教材のある側面が明瞭に対比的に浮かび上がらせようとするところに発していることから見ても、教師の側では主教材を特定しておいた方が、どの教材のどのような側面を明瞭に浮かび上がらせようとするかがはっきりするはずである。

私の考える「比べ読み」「重ね読み」においては、主教材を常に明確にするという基本的立場をとる。もちろん、学習者側にとって副教材の方が印象に残ったというようなことは起こり得るであろうが、教材研究および授業の構想の段階では、主教材を明確にしておくという手続きをとるということである。

松本が、「主教材を特定しておいた方が、どの教材のどのような側面を明瞭に浮かび上がらせようとするかがはっきりする」「主教材を常に明確にするという基本的立場をとる」と論じているように、「比べ読み」はあくまで主教材の特色を浮かび上がらせるための手段である。

本論においては、絵本を底本にした教材「海の命」と、その絵本の原作である「一人の海」とを比べ読むこ

とによって、「海の命」の〈空所〉を埋めることを試みた。したがって、ここでの主教材はもちろん「海の命」である。本論の冒頭において述べたように、こうした方法はいつも使えるものではなく、教材研究の方法としては変則的なものであろう。ただし、「海の命」の〈空所〉を埋める考察の成果を教師が知ることににより、教材研究の幅を広げることができるのは確かである。

先の引用において、「教材研究および授業の構想の段階」と松本が述べているところに注目したい。本論においては、「教材研究および授業の構想の段階」の中の「教材研究」段階における「比べ読み」をおこなった。松本の言うとおり、教材研究は授業のためにおこなうものである。ただし、本論の成果を実際の授業においてどのように使うかは、教師自身の判断に委ねられている。本論での考察が、教材「海の命」の授業実践をさらに豊かにすることに役立つことを願っている。

最後に大江雅之（2018）の授業実践に即した「一人の海」との比べ読みをおこなった論考と12の〈空所〉の提示に対して感謝したい。

【注】

- 1 「三通りの学習者の反応」とは次の三つのことである。○「夢」の内実の一つ目として、原作通りに瀬の主に「父のかたきを討つこと」であると捉える結合が生まれる。○「夢」の内実の二つ目として、「瀬の主に会おうこと」であると捉える結合が成立する。○「夢」の内実の三つ目は、「父と一緒に海に出ること」と捉える結合である。大江雅之（2018:72-73）より

【引用・参考文献】

- ヴォルフガング・イーザー(1982)『行為としての読書—美的作用の理論』響田収訳、岩波書店
 大江雅之（2018）「立松和平『海の命』指導論—空所を読む力をつけるために—」弘前大学大学院教育学研究科 修士論文 <https://hirosaki.repo.nii.ac.jp/> にて検索及び入手可能（2020年9月30日確認）
 大久保典夫、根本正義、鈴木敬司編『文学教育基本用語辞典』（1986）「教育科学国語教育」362号 明治図書 項目「くらべ読み」
 小関智弘（2003）『職人学』講談社
 佐藤佐敏（2017）「身体反応に基づく『海のいのち』の教材論— 適及的推論と叙述の響き合い—」『人間発達文化学類論集』第25号 pp. 21-29
 昌子佳広(2005)「教材『海の命(いのち)論』(2)—立松和平『一人の海』との比較をもとに—」『国語教育論叢』15 島根大学教育学部国文学会 pp. 211-222
 高橋正人（2018）『海のいのち』における時間構造と海の意味に関する考察—重層的な時間と母の子宮をめぐる— 『人間発達文化学類論集』第27号 pp. 39-54
 中野登志美（2017）「立松和平『海の命』の教材性の検討—絵本『海のいのち』と『一人の海』を視野に入れた読みの構築—」『論叢国語教育学』第13号 広島大学国語文化教育教育学講座 pp. 27-35
 西辻正副（1999）「物語教材の読みの試みⅡ：文法読みによる『海の命』の作品分析」『国語教育学研究誌』20号 大阪教育大学国語教育研究室 pp. 138-139
 松本修（1997）「『比べ読み』『重ね読み』の授業」『Groupe Bricolage 紀要』 pp. 2-6
 松本修（2018）「埋められない空所—『海の命』の語りと読み—」『国語科学習デザイン』第2巻第1号 国語

科学習デザイン学会 pp. 42-51

細恵子 (2021) 「U 理論を用いた文学教材「海のいのち」の授業構想— 小学校 6 年児童の実態調査を踏まえて —」『初等教育カリキュラム研究』第 9 号 pp. 21-33